



みどりの妖婆 Green-witch (1974) スーザン・クーバー (浅羽英子訳) 評論社 (8/20 刊・¥1200)

《闇の戦い》の第二部。前作で手に入った聖杯が、何者かの手によって奪われてしまう発端から、話は始まる。

ドルー兄弟とウィルは、再びイギリスの漁港、トリウィシックにむかった。そこでは、ちようと、緑の妖婆と呼ばれる、地元の祭が行なわれている。——やがて、《闇》の力が、彼らに干渉をはじめた……。

前作の書評(『光の六つのしるし』)では、『指輪物語』との類似性が指摘されていたが、今回は少し趣が異っている。いわば伝奇小説風な、トリウィシックの習俗、緑の妖婆の儀式に、物語が溶けこんでいて、けっこうまとまっているからだ。それは、全体の流れで見た場合、《闇の戦い》の一エピソードにすぎないだろう。ただ、むしろ本筋より、ローカルな地方のイメージや伝承の方が、かえって面白く書けているようにも思える。著者の意図は、(『赤い日と黒の山』でも描かれた)伝統的な、闇と悪と、光と正義との戦いにある。既存の作品を超える内容は、まだ今後の展開いかんによるだろうが、イギリスの風俗との混交で、少し変わったものができるかも知れない。